

ニクソンの「チャイナ・イニシアティヴ」(2・完)

石 井 修*

- I はじめに
- II “POLO II”
- III コミュニケ作成
- IV 中国代表権問題との絡まり
- V ニューヨークの裏チャンネル
- VI ヘイグ訪中
- VII ニクソン訪中の準備
- VIII ニクソン訪中
- IX おわりに

I はじめに

中国がGDPで日本を抜き世界第2位となったことが報じられた。2010年8月1日の米国からのニュースだった。それを遡ること40年、中国はプロレタリア文化大革命とソ連との対立のため、経済的、外交的孤立の只中であつた。この中国を今日言う「関与政策」(engagement policy)で国際社会に引き入れ、その責任ある一員にしようとしたのが、1969年1月20日正午に米国の第37代大統領に就任したニクソン(Richard M. Nixon)だった。

このとき米国はヴェトナム戦争の泥沼の中に喘いでおり、財と人命の甚大な損失を蒙っていたうえに、国内外で批判と抗議に曝されていた。遅く見積もっても、第2次世界大戦末期までには世界の覇権を確立した米国のその“覇権”が揺らいでいるかのようにあつた。国際経済面では敗戦から立ち直った日本や西独の猛追を受け、軍事面では、キューバ・ミサイル危機での屈辱を晴らそうとソ連はICBMの分野で米国とはパリティを確保したかのようにあつた。日本は1968年にGNPで西独を抜き資本主義圏で第2位に躍り出たところだった。

ニクソンにとっての喫緊の課題は東南アジアでの戦争を終結させることであつ

『一橋法学』(一橋大学大学院法学研究科)第10巻第1号2011年3月 ISSN 1347-0388

※ 一橋大学名誉教授

だが、かれにはより長期的に「平和の構造」(the “Structure of Peace”)を創出したいとの願望があった。このためにも、そしてヴェトナム問題解決のためにも、20年余に亘っていた中国との対立を緩和させ、これを梃子として対ソ「デタント」を確立することが至上命題と感じられた。

ニクソンやかれの国家安全保障問題担当補佐官を務めたキッシンジャー(Henry A. Kissinger)について、またその政治哲学や戦略について書かれたものは夥しい数にのぼっている。

前稿ではニクソンにはこうした戦略的思考に加えて、東洋、とりわけ中国大陸への憶憬というロマンチズムも作用していたことを指摘した。

本稿は前稿に引き続き、1971年7月15日の「ニクソン・ショック」から1972年2月のニクソン訪中までの足取りを辿ることを目的としている。従って、あくまで米国の側から見た歴史の再構築に留まる。その際、米戦略のなかに“日本”がどう位置付けられていたか、また米中交渉の過程で“日本カード”が相互で如何に利用されたか、に特別の注意が払われる。

II “POLO II”

7月訪中の時点で、次回にもキッシンジャーがまた北京に戻って来ることは必ずしも自明のことではなかったが、結局かれに落ち着いた。そして“POLO II”の準備が始った。再訪の具体的な段取りは、パリでウォルターズ(Vernon A. Walters)陸軍少将(米大使館付武官)と中国の黄鎮(Huang Chen)駐仏大使との秘密チャネルを通して行われた。ウォルターズは副大統領時代のニクソンにスペイン語の通訳として中南米旅行に随行して以来、ニクソンのお気に入りとなった。滅多に人を褒めないキッシンジャーですら、「素晴らしい[フランス語]通訳」とかれを評した。かれは母語である英語のほか、仏、西、伊、独の言語に堪能で、ロシア語にも通じていた。かれはこの職責を果たしたあと72年3月にCIA副長官に任命された。

ウォルターズはソ連の諜報員のみならず、自国のCIAやFBIにも悟られないように気を遣わねばならなかった。パリの中国大使館へは徒歩で行くか、クルマの場合は遠くへ停め、そこから歩いた。その際、小さな手鏡で後方を映し出すか、

度々振り返った。ポンピドゥー (Georges Pompidou) 仏大統領の直々の許可のもとキッシンジャーを少なくとも2度フランスに密入国させている¹⁾。

キッシンジャーは中国側への特別の配慮を欠かさなかった。黄大使にホワイトハウスの秘密の直通電話番号などを緊急時のためとして教え、7月訪中の際、北京で顔を合わせた黄華 (Huang Hua) が駐加大使に任命されたことで、かれにもその番号を教えるように依頼した。

キッシンジャーは71年10月16日に、今度は大っぴらに出発した。主要メンバーは総勢14名。ほかに大統領訪中の際の衛星中継の責任者およびシークレットサーヴィス、また言うまでもないが、パイロットをはじめとする乗務員がいた。周総理の主催した一行の歓迎会には、これら全員が漏れなく招待された。

旅行中のキッシンジャーとの連絡には再度ホワイトハウスからヘイグが当たった。中東情勢、「緊張が新たな高みに達した」印パ関係など、刻々と動く国際情勢をキッシンジャーへ伝え、キッシンジャーからも指示が出された。またパリの裏チャンネルからの報告もヘイグ経由でキッシンジャーに伝達された。「印パ紛争はキッシンジャーの訪中を妨害する試みかもしれない」とヘイグはキッシンジャーに連絡している²⁾。

北京到着前のキッシンジャーへのヘイグからの情報 (10/18)。エチオピア皇帝のハイレ・セラシ (Haile Selassie) がイランのバルセポリスでアグニュー副大統領に10月14日に会った。皇帝は中国を訪問したあとイランに立ち寄っていた。中国では毛、周らと会談した。「毛は大統領の来訪を待ち望んでいるが、実りあるものになるかについては懐疑的だ、とハイレ・セラシは語った」ことが伝えられている。翌19日には、印パについてのメッセージを貴方の指示通りに“D”へ渡した、とヘイグからキッシンジャーへ。“D”は不明だが、ワトソン (Arthur “Dick” Watson) 米駐仏大使のことだろうか。

出発前のキッシンジャーのために作成された「トーキング・ポイント」がある。7月会談の内容を踏まえたものである。その「ソ連」部分には以下のような

1) Walters (1978) 532, 536-41; Garthoff (1994) 263

2) Haig to Kissinger 10/21/71 China - HAK Oct 1971 Visit (Box 1035) For the President's Files - China/Vietnam Negotiations NSC Files Collection

個所がある³⁾。

- 米ソは決して中国に対して共謀することはない
- 米＝ソ＝日が組んで、中国に襲いかかることはない
- SALT〔米ソ間の戦略兵器制限交渉〕についてはいつでも中国に説明する用意がある
- インドがソ連から大量の武器援助を受けて拡張主義に転ずるだろう、と周は信じている
- 中国が分割されてしまうのではないかと周は惧れている
- ピンポン玉〔＝ピンポン外交〕はソ連を混乱に陥れた
- ソ印平和友好協力条約〔71年8月9日、ニューデリーで調印〕は軍事同盟であり、明らかに中国とパキスタンとを意識したものである
- ソ連の提案している「核保有5カ国会議」は投げ縄で中国を縛ろうとするもので、絶対に拒否する

このような中国の脅威感、孤立感、キッシンジャーの手の内にあるソ連カードや日本カードを切り易くすることであったが、キッシンジャーは中国を安心させることで「チャイナ・イニシアティヴ」を押し進めようとする。

他の個所には、「中国は米日同盟に楔を打ち込もうとしている」「中国はわれわれに対して日本カードを使おうとしている」との件もある。

中国到着の71年10月20日から26日までの間に、キッシンジャーは周との国際情勢についての意見の交換に25時間以上をかけ、コミュニケ（ニクソン訪中時の「上海コミュニケ」となるもの）作成のためにさらに15時間を費やした。

10回に及ぶ周＝キッシンジャー会談のなかで、一番多く日本についての（カラフルな）言及がなされているのは、22日午後の第4回会談においてであった⁴⁾。南北朝鮮、南アジア（＝印パ紛争）、ソ連、軍備管理にも話が及び、英文議事録は最多の40頁である。すでに既刊書などで紹介されている周の日本についての表現は、この会談録の中に見出せる。「日本には翼が生え、今にも飛び立とうとしています」と、「日本は、米国の手綱（control）なくしては、いたるところで、

3) Talking Points 10/12/71 Soviet Union POLO II Briefing Book (Box 1034) 同上ファイル

4) MemCons HAK Visit to PRC Memcons - originals Oct 1971 (Box 1035) 同上ファイル

奔馬 (a wild horse) です」である⁵⁾。

周が、日本の経済大国化が軍事大国へ変身する必然性とそれへの強い警戒感をキッシンジャーに対して率直に表現しているのに対し、キッシンジャーは、ひとつに、自分自身の対日不信感から、いまひとつは、周の恐怖心をさらに掻き立てることにより米日同盟の現状維持が中国の国益に適っていることを理解させるため、さらには、会話の潤滑油、ないしは「チャイナ・イニシアティヴ」促進のために、相手に迎合する言辞を弄している。

キッシンジャー—中国には伝統に由来する世界大の (universal) 視野があります。しかし日本の視点は部族的 (tribal) です。

周一かれらはより狭いということですね。奇妙なことです。かれらは島国ですし、英国も島国です。

キッシンジャー—両者は異なっています。日本人は自分たちの社会はとても特異なもので、何にでも適応できて、それでなお国家の本質を保持できると信じています。それゆえ、日本人は突如として爆発的な変化を遂げることが出来るのです。かれらは封建制度から天皇崇拜へと2～3年で移行しました。天皇崇拜から民主主義へ3か月で移行しました。

周一いまや、かれらは再び天皇崇拜へ逆戻りしようとしています。

....

周一天皇に会われたことはありますか。

キッシンジャー—ええ、アラスカで。今朝、貴国の外交部長に説明しました (笑い声)。

周一とても複雑な人物ですね。

キッシンジャー—そのあと、儀典長はノイローゼになりました。非常に複雑です。深遠な (profound) 会話はありませんでした。

....

キッシンジャー—日本人は他の人々の態度に対する感受性を持っていません。……総理のおっしゃった経済成長はそれ自体の不可避性を孕んでいる

5) 例えば、添谷 (2005) 109 ; 毛里 / 増田 (2004) 356 ; Mann (1998) 43 などの先行研究

ということには賛成します。そして日本の経済発展のやり方が日本の部族的特徴を示しているということにも部分的に総理に同意します。なぜなら、日本のやり方は多くの国を自分の政策に結びつけようとする目的を持っているからです。ですから、私は日本に対して幻想は抱いていません……自力で自衛する日本はすべての周辺国にとって客観的に危険な存在となるでしょう。より強力になるでしょうから。それゆえ私は、現在の日本の対米関係が実際には日本を抑制しているのだと信じています。もしわれわれがシニカルな政策をとろうとすれば、われわれは日本を解き放ち、自らの足で立つように仕向けるでしょう。これは日中間に極度の緊張を生み出すでしょう。そしてわれわれはその間で板挟みになることでしょう。それはとても近視眼的です。貴国か米国のいずれかが、その犠牲になるでしょうから……

(この辺では、キッシンジャーが殆んど一方的に話し続ける。7月訪中直前にニクソンと打ち合わせた“日本カード”のシナリオに沿うものだった。少し置いて)

キッシンジャー—日本人が本当に在日米軍基地の撤退を望むときにはいつでもわれわれは撤兵します。われわれはそもそも自分たちのために基地を日本に置いているわけではないのです。もし実際にそうなったときには、あなた方は喜ぶべきではないと思います。なぜなら、ちょうど今日われわれが日本を経済的に築き上げたことを後悔しているのと同じように、貴国もいつの日か後悔することになるでしょう。

「われわれはそもそも自分たちのために基地を日本に置いているわけではないのです」の件は、キッシンジャーの本心ではなく、「日本カード」の思い切った一手だったか、それとも日本嫌いのキッシンジャーは日米同盟をも嫌っていたと考えるべきか。謎である。ほかにも「もし米国が極東で攻撃計画を立てたとしても、日本は必要ではないでしょう。日本にある基地は必要ではないでしょう」との件もある。

日本の“経済大国”化をキッシンジャーが苦々しく思っていたことも、本会談録からも明白である。

Ⅲ コミュニケ作成

ニクソン大統領の訪中の際に発表される共同声明の草案作りには、莫大なエネルギーが費やされた。

まず、米国側が第1次草案を提示したのが、北京滞在3日目の10月22日だったが、中国側の対案は24日朝まで示されなかった。そのあと米国側の第3次草案が25日夜10時に示され、中国側の対案は翌朝(26日)午前4時45分となった。双方を調整した暫定最終案が完成したのは26日午前8時だった。米国チームの帰国予定は25日だったから、北京滞在を24時間延長したことになる。双方の草案の総頁は英文で50頁を超えるものとなった⁶⁾。

難航した理由は、米国側の両国の協調性を打ち出した多分に曖昧な文章に満ちた第1次草案に対して、中国側が革命的イデオロギーの色彩の濃い対案(中国側第1次草案)を提示し、ハードルを高めてしまったことである。この中では、「革命」「人民の革命的闘争」「すべての抑圧的の人民の闘争」「諸人民の闘争」などの文字が躍っていた。

この背景を知るうえで同日(24日)に行われた周=キッシンジャー第7回会談の議事録が手掛かりを与えてくれる。周はこの午後の会談で、キッシンジャーに対して、「1時間にわたる火の出るようなレクチャー」を行った。メッテルニヒ主宰のウイーン会議をテーマに博士論文を書きハーヴァード大学教授となったキッシンジャー博士を相手に、周は延々としかも滔々と、米国独立革命、フランス革命、神聖同盟などについて“講義”し、「人民」の「進歩」の歴史を跡付けた。キッシンジャーはこれを毛沢東が周に対して“気合い”を入れるべく、叱咤激励した結果だと見た。つまり、毛の革命史観を反映させたものだった⁷⁾。

米国側にすれば、中国第1次案を受け入れることは、北ヴェトナムの闘争を正当化し、米国の不当性を認めることになる。かような革命イデオロギー的言辞に満ちた文案を受け入れることは、ニクソン訪中の際「米国の大統領に屈辱を与え

6) Communiqué drafts Book II China Visit Record of previous visits arranged by subject matter (Box 846) 同上ファイル

7) Memorandum for the President from Kissinger n. d. “My October China Visit; Drafting the Communiqué” Book III China trip - Record of previous visits July - Nov 1971 (Box 847) 同上ファイル

る」ことに等しかった。

米国側の強い抵抗の結果か、中国の第3次草案ではイデオロギー色がかなりトーンダウンされた。「解放」の語は使われているが、「革命」は米国側の強い主張に譲歩し「進歩」となった。「闘争」は1か所のみとなった。だが「いかなる外国の介入も絶対に許されない」「ヴェトナム、ラオス、カンボジアの諸人民の闘争」「すべての被抑圧人民、被抑圧民族による自由と解放のための闘争を断固支持する」は残された。また「歴史の不可抗力的趨勢」「すべての外国兵力は自分の国ぐに引き揚げるべし」もそのままだった。

最終草案では、米中双方に根本的な立場の相違 (essential differences) が存在することが明示された。これは中国側の最初からの文言である。また具体的には、中国側がすべての国 (台湾、韓国、日本、沖縄など) からの米軍撤退を主張。米側は日本や韓国へのコミットメントを明示。とくに米日同盟の堅持を謳った。

台湾問題が最大の相違点だったが、中国の立場に米国は「異議を申し立てない」(not challenge) というキッシンジャーの巧妙な外交的修辞法を周が喜んで受け入れ、解決された。

両国とも同盟国へのコミットメントには変更のないことを示さねばならなかった。少なくとも文面上では、中国はヴェトナム問題で米国へなんらの配慮、譲歩も示した形跡がみられない。ついでながら、翌年2月のニクソン訪中時の「上海コミュニケ」では「革命」の語が舞い戻り、1回だけではあるが、使用されている。

こうして、コミュニケ草案作成は極めて困難な作業となり、米国側一行の帰国を遅らせることとなるのである。最終局面では部下にばかり任せてはおけないとばかり、多忙で疲労困憊しているはずの周も直接、作成にかかわってくる。

帰国直後にキッシンジャーの名前で作成されたニクソンのための「チェックリスト」で、コミュニケ作成の2晩を含む2日半の過程で、草案がどのように変貌していったか、また会談の主要論点を簡潔に記述している。

- 草案は、焦点のぼやけたものから、鮮明な修辞上の相違へ、そして最後には、バランスのとれた文書へと変質を遂げた。
- 逃げ口上の、不吉なでっち上げの妥協の産物ではなく、正直で、名誉ある、元気のよい、しかし互いの相違点を示すものへと変った。

- 双方とも、自分たちのそれぞれの同盟国に安心感を与え、コミットメントを再確認するもの
- 現実的に互いの相違を認め合いながら、しかも前向きに共通点をみいだすことができた。
- 台湾問題が最も困難
- 中国側は、インドシナ問題で概ね協力的な態度をとった。しかし、台湾問題との取引材料(link)ともみているようである、と気になることを述べている。
- 中国側は、絶えず日本のことを気にしている。とくに、日本軍の朝鮮や台湾への進出を危惧している。(周=キッシンジャー会談のなかで、日本の陸上(?)自衛隊が平服で韓国へ派遣され、助言を与えている、と周が主張。キッシンジャーは、調査したあと、これは事実だった、と答えた)
- 中国側は、台湾、朝鮮、日本、沖縄すべてからの米軍の完全撤退を主張する一方で、駐台米軍の撤退に期限をつけないばかりか、日本軍国主義の復活を恐れて、米軍が一部留まることを望んでいる⁸⁾。

IV 中国代表権問題との絡まり

キッシンジャーの10月訪中が決定した時点ですでに、国連での中国の代表権についての表決との関連で、そのタイミングの悪さが懸念されていた。そして、その危惧は現実のものとなり、米国政府は苦しい立場に立たされることになる。

ここで、中国代表権問題の足取りを少し見ておきたい。

1970年10月にホワイトハウス報道官ジークラー(Ronald Ziegler)は「米国は台湾の犠牲のもとに、北京を国連に入れることに反対」(=米国は北京の国連加盟には反対しないが、台湾追放には反対)と発言した。ちょうど、カナダ、次いでイタリアによる中国承認(外交関係樹立)の時期にあたる。

11月に開かれた第25回国連総会での加盟国の投票動向は興味深いものであった。5か国提案の「重要事項」決議案は前年よりさらに賛成が減り、反対と棄権

8) “Checklist for the President on China Trip” (by Kissinger) Communiqué drafting, working papers & drafts Oct 19 (Box 1034) 同上ファイル

が増えた。5か国提案とは1961年に遡るが、日、米、豪、伊、コロンビアの5か国が中国の代表権を「重要事項」(Important Question = IQ)とし、単純多数でなく採決には3分の2以上の票を必要とするという決議のことである。この同じ総会で台湾追放を提案する「アルバニア案」(アルジェリアなどとの共同提案)は3分の2以上の賛成を得ることは出来なかったものの、初めて賛成が反対を上回った。

キッシンジャーの7月訪中の際、周は「中国が国連メンバーになっていないことは久しいから、もうしばらく待つことは構わない」「しかし、いかなる形式の“二重代表権”も絶対に受けることはない」と明言していた。10月会談でも周は“今年でなければ”と言う熱心な様子は見られない、とキッシンジャーが北京から「ヘイグだけに」と断りながら伝えている。また採決で仮に勝っても得意がってはいけない、とも注意した⁹⁾。

米務省は長年、台湾の「帰属未定論」の立場をとってきた。キッシンジャー7月訪問のとき、周からこれに対する激しい抗議を受けた。71年8月2日、ロジャース国務長官は「二重代表権」構想を公式に打ち出した。北京の国連加盟には反対しない、しかし台湾追放には反対。中国の安保理議席は総会の決定に委ねる——というものだった。同月の5日と6日、周と黄華駐加大使は米人記者に「中国はこの構想によって議席を受け入れることはない」と反駁した。このため、安保理議席は台湾でなく中国の方に認めると務省は譲歩した。

こうしたなか、71年9月21日に第26回国連総会が開幕。総会の総務委員会は表決によりアルバニア案の表決を「二重代表権」提案の表決より前に行うと決定した。

キッシンジャー訪中のさなかの10月25日、重要事項提案は否決、アルバニア案は採択された。二重代表権提案は投票にすら付されず廃案となった。このとき、台湾は除名を待たずに脱退を表明した。

キッシンジャーの10月訪中のタイミングについては、国連総会の動きに照らして、ロジャース、ブッシュ (George H. W. Bush) 国連大使、それに台湾も懸

9) Kissinger to Haig 10/22/71 China - HAK Oct 1971 visit (Box 1035) 同上ファイル

念を示した。しかしキッシンジャーの訪中についての発表はホワイトハウスを通して10月5日に行われた。台湾政府の外交部長である周書階（Chow Shu-kai）によれば、台北側には、この発表について事前に知らされなかった。これは台湾にとって、7月15日、8月15日に続く「3度目のショック」となった¹⁰⁾。

米政府内では、国務省対ホワイトハウス（とくにNSC）、ロジャース対キッシンジャーの対抗関係が事柄を余計に複雑にしていた。ロジャースは、米中首脳会談の準備でキッシンジャーが果たした役割を来る米ソ首脳会談では自分にやらせてほしいとニクソンに訴えており、ニクソンはまだ決断していない。いずれロジャースの願いを認めるだろう。また国連問題ではロジャースはブッシュを押しつけて、自分を圧倒的に行動力のある人物として世間に印象付けようと努めている。このようにヘイグはキッシンジャーへ連絡した。別の電文でも「ブッシュはお飾りでロジャースが実行部隊」と形容した¹¹⁾。

ニクソンは「台湾を犠牲にした訪中」という国務省の批判からキッシンジャーを守るため、キッシンジャーの帰国を遅らせることを考えた。そのため、帰途に給油のためだけでなく、アンカレジに1泊することが決められた。しかし、わざと帰国を遅らせる必要はなくなった。北京でのコミュニケ草案完成が予定より1日遅れたからである。

キッシンジャー一行の搭乗した「エアフォースワン」は10月26日の午前10時30分に北京を出発し、上海を経由して、アンカレジのエルメンドーフ空軍基地に給油のため着陸。日付変更の関係でアンドルース空軍基地には同じ26日夜に到着した。基地のはずれの報道陣の目の届かないところだった。今回の訪中についての発表（announcement）は、最終日の周との話し合いで、米中同時にワシントン時間10月27日午後4時となった。キッシンジャーはヘイグにこのことについてリークのないように、とくに「ロジャースには見せるな」と念を押した¹²⁾。

ニクソンはキッシンジャーが出来るだけ目立たないように帰って来てほしい、そして真先に自分に会って、6時半に夕食を共にしたい。自分より先にキッシン

10) 張(2007)244

11) Haig to Kissinger 10/23/71 China - HAK Oct 1971 Visit (Box 1035) 同上ファイル

12) Kissinger to Haig 10/24, 25; Haig to Kissinger 10/26以下同上; Kissinger (1994) 785

ジャーがロジャースに会わないように神経を使っている、とヘイグは機上の人となっていたキッシンジャーに伝えたのである。

キッシンジャーは回顧録の中で、政権内の或る者は自分の訪中と国連代表権問題とを絡めて、自分の立場を弱めようと企んだ、と憤慨している。この「或る者」とは国務省、とくにロジャースを指していることは容易に想像できる。しかし、国務省のみならず、NSCの国連担当のライト (Marshall Wright) やキッシンジャーの側近のホルドリジですらキッシンジャーの訪中のタイミングが採決での数票を北京に有利に動かした、と分析した¹³⁾。

キッシンジャーはこの2つの事柄の絡まりは、「苦痛な偶然の一致」ではあるが、「両者は全く無関係」であることを強調し、ヘイグにもプレスブリーフィングでもこの表現を繰り返した¹⁴⁾。

V ニューヨークの裏チャンネル

中国が台湾に代り国連代表権を与えられたが、これに伴い、キッシンジャーが北京で顔見知りの黄華駐加大使が国連大使を兼務することになった（この兼務は1年続いた。のちに外務次官の要職に就く）。

キッシンジャーの指示で、ニューヨーク市内に黄たちとの密会場所が設置された。中国国連代表部はローズヴェルトホテルの14階の1角に陣取ったので、密会場所も同じくマンハッタンのイーストサイドにある安アパートに決った。入口にドアマンもエレベータマンも居ない。会合は夜になってから、中国側のメンバーと米国側メンバーは必ず別々に入ること、など決った。11月22日に、あまりマスコミに顔の知られていないNSCのハウ (Jonathan T. How) 海軍中佐が黄大使にローズヴェルトホテル内で会い詳細を打ち合わせた¹⁵⁾。

キッシンジャーはこの秘密接触ルートにブッシュ国連大使を引き込んだ。最初の密会は11月23日夜に行われた。もうお馴染みになったブルックリン生まれの中

13) Kissinger (1979) 785 ; 張(2007) 246-47

14) Press Conference of Kissinger 10/27/71 China - HAK Oct 1971 Visit 同上ファイル

15) Memorandum for the Record 11/22/71 (from Howe) China exchanges Oct 20 - Dec 31, 1971 (Box 849) For the President's Files (Winston Lord) - China Trip/Vietnam 同上ファイル。Tyler (1999) 119も参照

国側女性通訳である唐聞生 (Tang Was-shen = Nancy Tang) には“Miss Kay”なる符号が与えられた。ニクソン訪中よりは、国連に関する事、印パ紛争などの国際情勢が主たる話題になった。

この会談中、キッシンジャーは「ブッシュ氏は直接私のために仕事をする」と言明した。国連大使とその上司の国務長官とを切り離す、“国務省外し”のキッシンジャーの策動だった。キッシンジャーはこの密会についてニクソンに報告した。「この新しいチャンネルは国連に関する事項」を話し合うものであること、また黄の態度からも、今年中国に代表権が与えられたことに驚き、むしろ戸惑っており、喜んだ様子はない、などと報告した¹⁶⁾。

ほどなく、このアパートで何事が起こっているのかと隣人は訝ることになる。ヘイグにあてられたメモランダムで、今後キッシンジャーが大型リムジンで乗りつけないこと、シークレットサービスがクルマから跳び出して、交通を止めたり、派手な行動をとらないこと、など警告した。いずれ場所をほかに移す必要も訴えている¹⁷⁾。

VI ヘイグ訪中

ニクソン大統領の訪中の前にもうひとつの（そして最後の）北京詣であった。キッシンジャーの腹心（実は、間もなくライヴァルの存在となる）でこれまで留守番役に徹していたヘイグが総勢44名にのぼる先遣隊 (advance party) を率いることになった。大統領の実際の訪問の予行演習の意味合いをもち、テレビ生放送などの技術的打ち合わせが主要任務だった。しかし、コミュニケのなかの台湾に関する米国側の文言をキッシンジャーから託されていたとも言われている。

44人の内訳は、公式メンバー18名（この中にホワイトハウス報道官ジューグラー (Ronald Ziegler) が含まれていた）、技術アドバイザー9名、操縦士ら乗務員

16) MemCon 11/23/71 (Box 849) 同上フォルダー、同上ファイル

17) Memorandum for Haig from Howe 4/24/72 “Precaution in Special Place” China exchanges – March 1 – June 24, 1972 For the President’s Files (Winston Lord) – China Trip/Vietnam 同上ファイル

17名だった。

先遣隊はニクソン大統領が実際に辿るルートをなぞるよう旅程が組まれた。アンドルースを71年12月29日に発ち、オアフ島のヒッカム空軍基地、グアムを経て、上海経由で、現地時間の72年1月31日の昼下がり、雪に白く覆われた北京に到着した。帰路は上海を1月10日出発し、エルメンドーフ空軍基地（アラスカ）を経て、（時差の関係で）同じ10日にアンドルースに戻った。

ハイグの出発に先立って用意された中国側に対する「トーキング・ポイント」として重要なのは次の3点だった¹⁸⁾。

(1) 殆どの米国の報道陣は浅はかな愚か者 (shallow idiots) で表面的なものや雰囲気しか見ない。そのことから大統領が当地 [中国] で恥 (embarrassment) をかかないことが決定的に重要となる。要するに、訪中の結果が大統領の世界的指導者としてのイメージの強化に繋がらねばならない。

(2) パリとニューヨークの裏チャンネルについて、今回私に同行する者に中国側から明かされないようにすること。その秘密を知っているのは、今回の一行のうちでは私のみであることを中国側に徹底させておくこと。

(3) 大統領と毛主席および周総理とのすべての会談にキッシンジャーが同席することが不可欠である。こうした会談が行われているときには、同時並行的に外相級会談などの予定を入れて、キッシンジャー以外の国務省関係者や他の随行員がそれら他の会談に出席しているように中国側に予定を組んでもらうこと。

ニクソンのイメージ作りについて、出発前のメモランダムがある。ハイグがキッシンジャーに宛てたものである。大統領の訪中が1972年大統領選挙のための宣伝行為であるかのような印象を中国側に与えたくない。もし中国側がそのような印象を持てば、交渉は米国にとって大変不利になる¹⁹⁾。

ニクソンが中国を訪れることに対しては、左右両陣営から批判が浴びせられていた。“リベラル”を売り物にしていたケネディ (Edward M. Kennedy) 上院議員 (民主党、マサチューセッツ州選出) は、中国の人権侵害を批判し、印パ紛争で

18) Haig Trip - Jan21 Talking Points - Private Meeting (Box 1037) For the President's Files (Winston Lord) China Trip/Vietnam 同上ファイル

19) Memorandum for Kissinger from Haig China - AH Visit Jan 1972 同上ファイル

米国が、対中関係改善のためにパキスタン寄りになり、対印関係を悪化させたことを支払った大きな「代償」と形容した。『ニューヨーク・デイリーニュース』の記者は、ニクソンの訪中と訪ソを大統領選挙の年の「見世物興行」と皮肉った²⁰⁾。

ヘイグ訪中は最悪のタイミングだった。71年末に米軍が北ヴェトナムに激しい空爆を再開していた。ヘイグは周と2度ほど会談(1972年1月3日、7日)を行ったが、2度とも周はこのことを持ち出し、激しく非難した。

3日から4日に日付の変る夜半に行われた第1回会談で、

周一昨年末の空爆によってわれわれは苦しい立場に立たされている。「空爆は不要だった」「中米間には根本的な立場の相違がある」。今も中国国内には批判勢力がはびこっている。「美帝」を洗脳されてきた一般人民が一気に〔対米和解という〕政策転換を受け入れることがいかにむずかしいか分ってほしい。毛主席はこの政策転換に踏み切ったが、米国大統領の中国来訪が失敗に終わることもありうるとも考えている。

第2回会談も6日から7日に日付の変わる夜半に行われた。周はヘイグへの回答だとして周として空爆を非難するペーパーを読んだ。「タフで、ポレミックなトーンだった」²¹⁾。

ヘイグがヴェトナム戦歴を持つ陸軍軍人で、いわば“ヴェトナム専門家”であること、かれの訪中のタイミングとを口実にして、ソ連がこの爆撃を米中の共謀によるものと非難した。そして、ソ連が第三世界革命のチャンピオンになろうとしている、と中国は気にしている。周は爆撃を激しく非難するとともに、中国が北ヴェトナムを強く支持していることを強調し、こうしたことは、ニクソン訪中にとっては「好ましからざる要素」だと述べた。かれは、米国が東南アジアで過ちを犯したこと、米軍をヴェトナムへ送り込んだこと自体、「侵略」であること、米軍はカンボジアにも侵攻したこと、タイや米CIAがインドシナで暗躍してい

20) Memorandum for Kissinger from Huntsman 10/15/71; Memorandum for Buchanan from Haig 10/23/71 China Trip July - Nov 1971 President's Trip Files (Box 100) 同上ファイル

21) Memcon 1/3/72 Haig Trip Memcons Jan 1972 (Box 1037) For the President's Files (Winston Lord) China Trip/Vietnam 同上ファイル; Haig to Kissinger 1/8/72 China - AH Visit Jan 1972 同上ファイル

ることにも言及した²²⁾。

ヘイグは空爆についての弁解をしたあと、反転して、中国側の不安をあおる議論を展開した。ソ連は中国への包囲網を形成しようとしている。ソ連は南アジア(=インド)とインドシナ(とくに北ヴェトナム)で援助を強化している。これは米中接近(coming together)の試みに対抗しようとするものである。ソ連は中国を無力化させたあと、米国に敵対してくる、と²³⁾。

ソ連の動きについては、周はヘイグと認識を共有していた。前年7月15日のニクソン訪中発表の直後にソ印「平和友好協力条約」という名の軍事同盟を結んだ。またグロムイコ(Andrei Gromyko)が訪日した。ソ連はヴェトナム平和の邪魔をしている、インドがハノイの在外公館を格上げしたことなど、ソ連の対中包囲網を証明するものである、などと論じた。

ヘイグは、(中国国内と同様に)米国内にも批判的勢力のあることを持ち出して、ニクソン大統領の抱える問題の深刻さを訴えた。米国内に左翼(親ソかつ親印)と右翼(親台)との奇妙な結びつき(両者はまた中国の人権にも批判的なことで共通していた)が出来上がっていることを指摘し、そのためには、ニクソン大統領のイメージを訪中の成果と見栄え(appearance)の両方で高める必要を強調した。

周は、“イメージ”問題には冷淡だった。中国は米国側のイメージ作りには手を貸さない。イメージとは自分自身の行動によって自然と出来るものだ、と突き放した。「相応の外交儀礼と礼儀」は尽くすが、それ以上のことはできない、と協力を拒否した。

ニクソン訪中時のコミュニケ作成における台湾問題の取り扱いの難しさについては、両者とも十分に理解していた。キッシンジャーの10月訪中時にも解決できなかったことで、課題として残されているとの共通認識を示した²⁴⁾。

22) 周-Haig 第2回会談1/6-7 深夜 Haig Trip memcons Jan 1972 (Box 1037) 同上ファイル

23) 周-ヘイグ第1回会談(1/3-4深夜) Haig trip - memcons Jan 1972 (Box 1037) 同上ファイル

24) 周-ヘイグ第1回会談(1/3-4深夜) および第2回会談(1/6-7深夜) Haig trip - memcons Jan 1972 (Box 1037) 同上ファイル

VII ニクソン訪中の準備

ニクソン訪中までの米中間の連絡や打ち合わせはパリの裏チャンネルを通じて行われた。米国サイドはパリのウォルターズとワシントンのヘイグ間で交信がなされた。

日程については、キッシンジャーの7月訪中時から検討された。(1)大統領の中国滞在期間—米国の「5日案」に対し、中国の「7日案」、(2)中国側は、北京、上海のほか、風光明媚な杭州に1泊することに固執、(3)米国側の大統領夫人同行の提案。10月訪中でも、キッシンジャーはニクソンが5日間を望んでいること、また第3の都市の観光では宿泊せず、日帰りならば承知、と伝えた。夫人同伴について、中国側は当初、想定外だったため、不意を突かれた感じになったが、とくに異議はなく、米国次第ということになった²⁵⁾。

10月会談ではまた、ニクソンが毛と周にそれぞれ別個に、“差し”の会談を望んでいることを伝えねばならなかったが、キッシンジャーは「慎重に、頃合いを見計らって持ち出す。成功するようやってみる。しかし、重要な会談で周を外すことは大間違いだ」とヘイグに伝えた。キッシンジャーが周にこの問題を持ち出すと、これまで毛主席のどんな会談にも自分(周)は出席しているとの答えが返ってきた。キッシンジャーからの連絡を聞いたニクソンは、別々でなくとも(両者と同時でも)構わない、と引き下がった。しかしその他の者が加わると“ロジャース問題”をひき起す(國務長官は他国では首相の地位に匹敵するのだが)と、“ロジャース外し”が困難になることを指摘した²⁶⁾。

前年10月には、中国のキッシンジャーへヘイグから、ニクソン訪中時に台湾の“いたずら”が起こる可能性があり、中国側へ伝えてほしい、との連絡が入った。台湾の参謀本部が大陸に偵察機を飛ばし、写真を撮り、また中国側の反応を見極めることを考えているとの情報があるということだった²⁷⁾。

72年1月に入って、ウォルターズ少将が大統領が周総理主催の晩餐会で行う挨拶

25) Haig to Kissinger 10/22; Kissinger to Haig 10/23 ともに China - HAK Oct 1971 visit (Box 1035) For the President's Files - China/Vietnam Negotiations 同上ファイル

26) Haig to Kissinger 10/20/71; Kissinger to Haig 10/21/71; Haig to Kissinger 10/22, すべて China - HAK Oct 1971 visit (Box 1035) 同上ファイル

27) Haig to Kissinger 10/22/71 同上フォルダー、同上ファイル

拶のテキストを駐仏中国大使館員に手渡した頃のこと。ニクソンを乗せた大統領機を偽りの中国のマークを付けた台湾の軍用機が攻撃を仕掛けて来るかもしれない、との中国側からの情報が入った。ただし、この情報の信憑性を確認中とのことだった。ウォルターズの秘書が直ちにヘイグへ電送した²⁸⁾。

同じころのこと。ニクソン訪中と時を同じくして、キッシンジャーの北ヴェトナム側の秘密交渉の相手であるレ・ドク・ト (Le Duc Tho) 特別顧問 (政治局委員) が北京へ来ることが判明したので、この2人が会えるように中国がアレンジしてくれないかと打診した。しかし、それは2国間の問題であり、われわれ (中国) は関与しない、と2度にわたって拒否された。

大統領の安全については、当然のことながら、シークレットサービスの頭痛の種だった。とにかくかれらを不安にしたのは、中国側が自国の“主権”にかかわることとして、大統領一行の中国国内での移動は中国の航空機によることを強く主張し、米国が折れたことであった。

ニクソンは自分の外交的成果を米本国はもとより世界中にマスコミを通じてアピールすることを切望していた。ヘイグ訪中の目的の一つは、通信衛星による報道の態勢を整えることにあった。これとの関連で、東京・府中の米軍施設の名が1度ならず挙がった。しかし日本を経由することは中国の面子を潰すことになる。上海の電信施設が実際には使われたようである。セキュリティについては、中国側が5両の装甲車、135人のシークレットサービス要員を、そして大統領宿舍予定の各地には地上通信設備を設置することを約束した²⁹⁾。

大統領の訪中日程が確定した。北京到着は現地時間の72年2月21日。滞在は28日までとなった。これを受けて71年11月29日にホワイトハウスと北京政府との共同 (同時) 発表が行われることになった (太平洋岸時間の13時、ワシントンの16時)。しかし、それに先立って関係諸国への発表についての事前通告が必要だった。

28) Ouellete to Haig 2/9/72 China exchanges - Jan 1, 1972 - Feb 29, 1972 (Box 849) For the President's Files (Winston Lord) China Trip/Vietnam 同上ファイル; Walters (1978) 546もこのことに言及している

29) Memorandum for Kissinger from Hughes 11/16/71 China Trip July - Nov 1971 President's Trip Files (Box 100) 同上ファイル

この事前通告の段取りはまたもや「ゲームプラン」と称され、ヘイグからキッシンジャーへのメモランダム(11/24付)の形をとった³⁰⁾。キッシンジャーの意向で、実際にはロードが作成したものと思われる。通告相手国には順序(=順位)が示されている。(1)英国(ワシントン時間、11/25午後)、(2)仏(25日夜)、(3)西独(25日夜)、(4)ソ連(26日午後が訂正され、27日朝)、(5)台湾(26日午後が訂正され28日に変更)、(6)豪(26日午後)、(7)南ヴェトナム(26日午後)、(8)日本(28日午後が27日に変更)——と日本は8番目に位置づけられた。

こと「中国問題」であれば、まず台湾、そして日本、韓国への配慮がなされてしかるべきである。キッシンジャー NSC の対日評価の低さをはしなくも示したのではないだろうか。キッシンジャーの欧州偏重、白人重視を疑いたくもなる。ただし、日本の場合、ニクソン、キッシンジャーともに日本を「リーク」の最悪の国と考えていたので、この点も考慮されるべきかもしれない。

翌72年2月初めに大統領の連邦議会に宛てた外交教書(Foreign Policy Report)が発表された(2月28日付)、毎年、大統領により示されるもので、ニクソン政権にとって3回目のものだが、画期的な内容を含んでいた。「1979年代の米国外交政策—平和の構造の創出」と題され、外交全般に亘るものだが、そのなかで、ニクソン政権のもとでの対中政策の変化を跡付け、正当化し、議会への説得を試みようとする部分が目を惹く。

例えば、「政権のこうした動きはトーキョーからペキンへのプライオリティーのシフトを意味するか」と問いかけながら、「そうあるべきではない」と断言し、米日同盟と対中アプローチは両立するものだと弁じた。台湾との関係も急速に変わるものではなく、外交関係や防衛義務を従来通り、維持していくことを強調した³¹⁾。

30) Haig to Kissinger 11/24/71 “The game plan for the 29th announcement” China – President’s Trip July – Nov 1971 Henry A. Kissinger Office Files Collection Country Files – Far East; “Game Plan for Advance Notification of 11/9 Announcement” および Haig for Kissinger to Ambassador Rush など Presidential Trip – Peking [Nov 1971] (Box 499) President’s Trip Files NSC Files Collection

31) “U.S. Foreign Policy for the 1970s: The Emerging Structure of Peace; A Report to Congress by Richard Nixon, President of the United States”, February 9, 1972 in *Public Papers of the Presidents of the United States: Richard Nixon, 1972* pp. 194-346

同じ2月初め、キッシンジャーはフロリダ州キービスケインに休養中の大統領に宛てて2点のメモランダムを送った(2/5付、2/7付)。いずれもキッシンジャーが自分の2度の(とくに10月の)訪中の体験を踏まえて書かれた(実際にはロードラの作成とみられる)啓蒙的(さらに言えば、“指南書”的)なものであった³²⁾。

「新しい体験」の小見出しのもとで、「大統領閣下の中国側との会談は閣下がこれまで経験されたどのようなものとも異なるものです」「会談は、閣下がこれまでに行われた外交上の会談に比して、はるかに(内容的に)厳しく長いものになるでしょう」と警告する。中国側は“ちゃちな”外交上の取引(台湾も含め)ではなく、米国外交の方向性と(中国から観た)信頼性を求めて来るでしょう、とも注意を促す。かれらは狂信的な革命家であると同時にリアリストでもあり、(ソ、日、印などの)外部からの攻撃に曝されていることも十分承知している。かれらは歴史が自分たちの側にあると考えている。これら指導者は70歳台にあり舞台を去る前に一定の目標に到達したいと望んでいる。

中国は「真の平和は正義があって、はじめて成り立つもの。正義なしには、平和とは抑圧的なものであり、永続きしない」と主張しており、米中間で意見の不一致が生じるでしょうが、「閣下はこの不一致を率直に認めるべきです」。

末尾にある、周と毛についての考察はキッシンジャーが訪中で実感したことに基づいている。「周はこれまで私の会った政治家のなかで最も強烈な印象を与えられた、ドゴールにも伍する人物です」。毛が「哲学者、詩人、大戦略家、部下を鼓舞できるリーダー、ロマンチスト」であるとすれば、周は「戦術家、行政家、交渉者、細部に詳しく、[フェンシングで言う]突いて来り、はぐらかしたりする達人」です。この2人の組み合わせは「真に堂々たる手強いコンビ(a truly imposing and formidable pair)」です³³⁾。

32) Memorandum for the President from Kissinger “Your Encounter with the Chinese” 2/5/72 および “Sparring with the Chinese” 2/7/72 いずれも PRC Briefing Papers Sent to President, Feb 1972 (Box 91) Henry A. Kissinger Office Files Collection: Country Files - Far East. ほかに memorandum for the President from Kissinger 2/19/72 from Kissinger 2/29/72 “Mao, Chou and the Chinese Litmus Test” もある. Book IV The President Readings on Mao Tse-tung and Chou En-lai, Feb 1972 (Box 847) President’s Trip Files NSC Files Collection

2月9日の別のメモランダムでは、キッシンジャーの訪中時の10月24日会談を象徴的な例として、周と毛との関係を説明した。毛からの命令で周の態度が高圧的なものに急変し、激越な言辞を弄したことで、毛こそが周の「ボス」であることを痛感させられたとも述べている。

ニクソンはこれらのメモランダムにアンダーラインを引いたり、書き込みしたりしている。ほかにも、大統領のためにNSCが用意した100枚に及ぶブリーフィングペーパーがある(日付不明)。事項や国名などの13項目に分れている³⁴⁾。

インドシナ。中国はインドシナ全体をハノイの勢力が支配することは望まないのではないか。その時にソ連がハノイをその支配下に置く可能性があるからだ。中国は米国の撤退を求め一方で、ソ連の進出を怖れている。しかし、中国がハノイに対して、適切な戦争終結をするよう影響力を行使すれば、インドシナにおける“米中の共謀”の口実をソ連に与えることになる。従って、中国はハノイに対して影響力を行使しないだろう。

日本。中国から見れば「反動的な日本政府」はこれまで「美帝」と協力して日本の軍国主義を復活させ、中国を包囲しようとしてきた。加えて、「南朝鮮の反動主義者」「蘇連修正主義者」(今や「社会帝国主義者」)、それに「インドの膨張主義者」たちが、中国を包囲しようとしている。中国は、米日安保条約、米国の沖縄と日本本土の基地、それに台湾と南朝鮮の安全は日本にとって重要との声明[1969年11月の米日首脳会談の共同声明における「韓国条項」「台湾条項」と]に神経をとがらしている。

中国側の主張は、米日安保条約の破棄と日本の中立化。米国の立場は、米日同盟の解消は中国にとって逆効果になることを悟らせることである。独り歩きする日本は核武装を含む重武装の方向へと歩み出す。安保条約は日本に対する抑制効果を持っている。米国は日本が台湾や朝鮮半島に進出するようなことはさせない。

コミュニケ草案の日本の個所で、米中の表現は異なる。中国側——「日本人民の独立した、民主的な平和的で、中立的な日本を建設したいという願いを断固支

33) PRC Briefing Papers Sent to President Feb 1972 (Box 91) Henry A. Kissinger Office Files Collection: Country Files – Far East

34) 同上

持する。」米国側——「日本との友好的な関係を最重要視し、相互防衛条約の義務を引き続き遵守する」（この防衛条約の個所は最終文書（「上海コミュニケ」）にみるように、台湾との絡みで、最終的には「現在の緊密な結びつきを引き続き発展させる」に修正されることになる）。

なお、「われわれ〔米国〕はわれわれの安全保障上の理由からは日本本土の〔米軍〕基地を必要としない。ほかの地域での基地で必要は満たされる」との表現が出て来る。これをどのように理解すべきか戸惑う。もしこれがNSCの真意であるとすれば、日本にとって極めて重大なインプリケーションをもつものである。

ロジャース国務長官の名で、ニクソンへ宛てたメモランダム「台湾の将来」では、台湾が本土から分離している状態を中国が黙認しても、また（より可能性は低いが）台湾との平和的統合が実現しても米国としては受けいれる用意があると述べている。この国務省の立場について、NSCのホルドリジとロードがコメントし、国務省はこれまでの長年に亘る反共・親台の立場からの「大幅な移行」を示し、われわれNSCの立場に近づいた、としたうえで、ただし北京政府が台湾に対して抱いている領土的執着心の激しさを過小評価している、と批判した³⁵⁾。

VIII ニクソン訪中

ニクソン大統領はパット（“Pat”（= Patricia））夫人とともに予定通り、上海を経由して、1972年2月21日に北京に到着し、28日まで中国に滞在した。公式代表団15人、随員21人、マスコミ約80人などの総勢370人余が大挙して中国に押し掛けたわけである。ニクソン夫妻の一挙一動が大々的に報じられる、マスコミの一大イベントと化した³⁶⁾。

ニクソンは、その間1回の毛主席との会談、5回の周総理との会談、2回の全体会議に臨み、28日に「上海コミュニケ」を発表することになる。

35) Memorandum for the President from Rogers 2/2/72 “Policy for Taiwan” ; Memorandum for Kissinger from Holdridge/Lord 2/3/72 “China Trip Meeting with the State Department”, ともにChina - President’s Trip Dec 1971 - Feb 14, 1972 (Box 88) 同上ファイル

36) “Personal Contacts Between Americans and Chinese” China - President’s Trip Dec 1971 - Feb 14, 1972 同上ファイル

キッシンジャーが北京の宿舎に落ち着くや否や、周が来訪。午後2時30分から10分間程度の会話があった。

周一毛主席が大統領にお会いしたいと申しております。

キッシンジャー—ウインストン・ロードを同行させていいですか。

周一国務長官が怒りませんか。

キッシンジャー—かれには黙っています。少し経って発表すればよい³⁷⁾。

こうして歴史的な会談からロジャースは排除されることになった。ニクソンとキッシンジャーおよびNSCの官僚嫌い、国務省外し、ロジャース外しは徹底していた。それは北京での宿舎の配分にまで表れていた。ロジャースは外相会談(「カウンターパート会談」)と全体会議への出席しか許されず、ニクソン=周会談にはキッシンジャーがすべて出席したが、ロジャースは外された。このほか、コミュニケ作成を目的としたキッシンジャーと喬冠華(Chiao Kuan-hua)外交部副部長との会談が持たれていたが、ロジャースはこれに招かれなかったばかりか、進展中のコミュニケの内容についてさえ知らされなかった。キッシンジャーの腹心で留守番役のヘイグは2月24日付で「ロジャースを重要会議から外したことに国内で批判が起っている」と伝えた。キッシンジャーはのちに「国務長官はこの歴史的な場面[ニクソン=毛会談]から外されるべきではなかった」と回顧録ではしおらしいことを書いている³⁸⁾。

ニクソン=毛会談は北京到着日(21日)の午後2時50分から約1時間行われた。米国側は大統領、キッシンジャーに34歳のロードが速記係として加わり、計3名。中国側も毛、周、と外交部儀典局副局长の3名。しかし、通訳は中国側からの1名のみ。キッシンジャー7月訪中以来なじみの、ブルックリン生まれのナンシー・タン(唐間生)だった。会談は基本的に儀礼的なものだった。途中で毛が「私は右翼が好きです」と意表を突く発言をした。キッシンジャーは「左寄りの人は親ソですから」と応じた。日本について、ニクソンは既定の路線を述べた³⁹⁾。より

37) Memcon Kissinger, Lord, Chou 2/21/71 230-250pm Dr. Kissinger's Meetings in the PRC During the Presidential Visit, Feb 1972 同上ファイル

38) Haig to Kissinger TOHAK 128 2/24/72 China - President's Trip Feb 15 - 29, 1972 (Box 88) 同上ファイル; Kissinger (1979) 1057

重要なことは、この会談の持ったシンボリズムであろう。毛は高齢（1893年生まれの78歳）で病気がちだったとはいえ、遠来の客でかつ世界の“覇権国”の最高指導者を予告もなく突然、中南海の私邸に呼びつけたことではないだろうか。まさに中華帝国の皇帝が夷狄を引見するさまを想像させる。

このあと、キッシンジャーの宿舎へまたもや周が訪れる。すぐ行われる予定の第1回全体会議についての打ち合わせだった。4時15分。冒頭、キッシンジャーは周に対して、国務省に隠していることを中国側に口止めした。こコミュニケ草案、ニューヨークの裏チャンネル、米ソ関係や印パ紛争について話し合った事実などである。この場にいたのは、両者のほかにはロード、喬、外交部欧州太平洋局長。それに中国人通訳1名、中国人速記者1名だった。打ち合わせは5時30分に終了⁴⁰⁾。

この同じ会談で、ニクソンが毛との2度目の会談を行うかどうかの話合いがあった。周は毛の体調を理由に言葉を濁した。このときキッシンジャーは抗議めいた発言をした。「主席に呼び出されるまで大統領がじっと待っているというのは間違っています。大統領の威厳にそぐわないことです。」（結局、2度目のニクソン＝毛会談はなかった。ニクソン自身も2度目の会談にあまり意味を見出さなかったことが理由のひとつであった。）

ニクソン＝周会談は22日から28日の間に5回行われ、国際情勢全般が話し合われた。23日午後の第2回会談では、周から日本への警戒感が表明された。ニクソンは米日同盟が太平洋の平和に寄与していると応酬し、中国が強い独立国で隣国が中国分割に乗り出さないことが米国の利益だとも答えた。途中、中国側の情報管理の見事なことを褒めるとともに、日本の情報管理の不徹底を笑い種にした⁴¹⁾。

ロジャース国務長官と姫鵬飛（Chi Pen-Fei）との「カウンターパート会談」は5回開かれた。(1)外交関係を持たない両国の接触方法、(2)人的交流、(3)貿易、の3点が話し合われた。

39) Memcon 2/21/72 250 - 355pm China - President's Talks with Mao and Chou Feb 1971
同上ファイル

40) Memcon 2/21/72 Kissinger, Lord, Chou, Chiao and Chang 415 - 530pm 註36に同じ

41) Memcon 2/23/72 935-1234pm Kissinger, Holdridge, Lord, Howe, Ye, Chiao and Chang
註36に同じ

しかし、ニクソン訪中のなかで、実質的に最も重要で多大のエネルギーと時間が費やされたのは、コミュニケ作成のためのキッシンジャー＝喬会談だった。“外交交渉とはまさにこういうものだ”と実感させるものである。会談は友好的雰囲気の中で進められながらも、コミュニケのワーディング（とくに台湾関連）をめぐる双方の相違をいかに埋めるかの2人の懸命の努力が見られた。喬がキッシンジャーと堂々と渡り合っている様子も浮かび上って来る。

22日の打ち合わせがあり、23日から11回にも亘る両者の昼夜を分かたぬ交渉が「上海コミュニケ」を生み出した。キッシンジャーについて言えば、かれはこのほかにニクソン＝毛会談、ニクソン＝周会談、全体会議にも顔を出している。ニクソン夫妻が北京近郊や杭州の観光を楽しんで、報道陣のスポットライトを浴びている間にも、かれはコミュニケのことにかかり切っていた。それでも、かれの秘密主義が、後述の如く、最終段階でかれ自身を苦境に陥れることになる。会談の最中にも、キッシンジャーはユーモアを絶やさないが、「睡眠3時間」とか、また2度ほど「もし倒れたら部下に任せる…」と冗談めかしながらも、本音を漏らした。会談中、少なくとも2度、かれは日本が秘密を守れない国だと言って、中国側を笑わせている。

第2回目（23日）の会談で驚愕すべき事実が、会議録から浮かび出た。この日に限り、喬外交部副部長と外交部の局長1名といういつもの顔触れに加えて、中国軍部の事実上の最高指導者が出席した。中国共産党軍事委員会副主席の葉劍英（Ye Jian-ying）だった。全体会議では周総理に次ぐ席順である。事実上の国防大臣であり、林彪（Lin Biao）事件のあとかれの後任となった人物である。

「見返りはしない」と断りながら、キッシンジャーは地図や偵察写真を手に、極東ソ連でのソ連軍の兵力配備状況と能力についてこと細かに、具体的に説明を続けた。文書にして10枚分である。陸上兵力については、極東軍区、トランスバイカル軍区、モンゴリア、中央アジア軍区、シベリア軍区、内陸部軍区ごとに、歩兵師団、戦車師団機動ライフル師団、ミサイルの数。空軍力については、極東防空区、トランスシベリア防空区、タシケント防空区ごとに、爆撃機、戦闘機の機種と数。戦慄を覚える内容である⁴²⁾。

[MacMillan (2007) 242-243もこのことに言及している。Garthoff (1994) 261-

262によれば、7月訪中、10月訪中でもキッシンジャーは中国側にソ連の軍事情報を提供した。このことについては、ニクソンのみが知り、ヘルムズ (Richard C. Helms) CIA長官にも知らされなかった。]

なぜ、キッシンジャーはこのような一見破廉恥な行動に出たのだろうか。中国は米ソが“共謀”して自国に当たるのではないかと強い疑心暗鬼にあったが、その警戒心を解くことがまず考えられる。米中首脳会談のあと、米ソ首脳会談が開かれることが公にされていた。そしてすでに米ソ (や他の西欧諸国) のさまざまな会談や合意が成立ないし進行していた。ベルリン4カ国協定 (71年9月仮調印、72年6月正式調印)、全欧安保協力会議 (CSCE, 準備会議—1972年11月-12月)、中欧における相互兵力均衡削減交渉 (MBFR, 73年10月本交渉開始)。ほかにも、米ソ偶発戦争防止条約、包括的核実験禁止条約、生物兵器禁止条約、月面条約、米ソ民間航空協定、米ソ経済協定、環境問題協定、それに、米ソ軍備管理交渉 (SALT) はとくに核保有国となった中国にとって気懸かりな進展だった。

キッシンジャーは、「すべての交渉で、ソ連は世界の2極構造を確立したかの印象を作り出しています」「2国で共謀しているかの印象を与えないためにも、ソ連の5大核兵器国会議の開催 [中国が反対していた] に米国は同意しなかった」「中国に対して米ソが共謀している印象を与えないためにも、米国のソ連との交渉事について全て細心の注意を払って情報を提供します」などと伝えた。

キッシンジャーはまた葉に対して、印パ紛争のことで、ソ連が中国に攻撃を仕掛けてくる可能性があるが、中国は自分の直面している危険を分かっているのか、と揺さぶりをかけた。ニクソン、キッシンジャーともにソ連が仮に中国を支配することになれば、世界の地政学的バランスが崩れることを強く懸念していたことも動機のひとつと考えられる。別の言い方をすれば、中国がソ連に対するカウンターバランスになってくれることを望んでいた。しかし、キッシンジャーの細部にわたる中国への軍事情報の提供は、かつての朝貢制度の頃の“貢物”にも見えてくる。やはりキッシンジャーとしては、この米中首脳会談を何としてでも成功させたかったのであろう。

42) 同上 Memcon. 葉劍英 (Ye Jian-Yin) は林彪のクーデター失敗後にかれの後を継いだ人物 [Kalb and Kalb (1974) 246]

この頃、ソ連の方も米中の「共謀」について疑心暗鬼だった。ニクソン訪中に先立って行われたキッシンジャーとグロムイコソ連外相との会談のなかで、グロムイコは、米国が対中関係改善に乗り出したことには反対しない、しかし両国が「共謀」することには反対すると述べた。

2月24日以降もコミュニケ文案で揉めていた。24日には、中国側の文案に「革命」の語が復活した。台湾をめぐることは対立が融けなかった。台湾は中国の「一省」(a province) との中国側の文案は米国側には受け入れ難かった。この年(1972年)は大統領選挙の年でニクソンは再選を狙っており、「中国に台湾を売り渡した」との印象を米国民に与えるわけにはいかなかった。

中国側は、台湾からの米軍撤退が「順次」(progressively)であることには異議はなかったが、「最終的に完全な撤退」(a final withdrawal)の語が入らないことは受け入れられないとの姿勢をとり続けた。キッシンジャーは曖昧にしておきたかった。日程も詰まってきており、翌日(26日)は北京を離れ、杭州へ向うことになっていた。

喬は周の意見を確認し、午後に回答を読み上げた。キッシンジャーは喬にテキストを見たいと言って、中国側文案を手にとった。そこには“the progressive reduction and final withdrawal of all US forces and military installations from Taiwan”とあった。これはニクソンにとって深刻な政治的結果をもたらす事柄であり、キッシンジャーは伺いを立てねばならない。休憩時間にキッシンジャーはニクソンに会おうとしたが、ニクソンは午睡の最中だった。この日のキッシンジャー＝喬会談は翌26日の午前1時40分まで続いた。対立は融けず、台湾についても両論併記が決定的となった。

キッシンジャーは26日に杭州でロジャースにコミュニケの全文でなく台湾に関する箇所のみを見せると喬にも告げた。私はリークを恐れている、ロジャースは信用できるが、その下僚たちは別だ、ともキッシンジャーは述べた。他方コミュニケ作りに関与したとの意識をロジャースに与えて、國務省の支持を得る必要がある⁴³⁾。

43) Memcon 2/25/72 450 - 525pm; 2/25 1030pm - 2/26 140am 同上ファイル

ところが、最終段階でキッシンジャーは躓いた。2月26日深夜から払暁にかけてのキッシンジャー=喬会談で、キッシンジャーが韓国と日本の個所を修正したいと言い出したのである。喬は愕然とする。「いま26日の深夜、明日〔上海で〕公表。現在の文案でそれぞれの最高指導者の了承を得ている。明日、公表できなくなる。」「あれだけ長い時間を〔貴殿の最初の来訪以来〕費やした」。キッシンジャー「その通りです」。喬「北京での5日間は殆んど台湾問題に費やされた」「最後の5分のところで、また蒸し返している」。キッシンジャー「ご尤もです。私の至らなさのせいです」。さすがにキッシンジャーもこのとばかりは神妙だった。喬「毛主席はエドガー・スノウ氏に明かしたようにニクソンとの首脳会談が失敗に終わっても構わない。中国の台湾問題についての感情にはとても強いものがある」「私の立場がない。みな疲れ切っている」⁴⁴⁾。

このキッシンジャーの躓きはやはり極端な秘密主義、国務省外しに帰せられるべきであろう。杭州で一体何があったのかについて、キッシンジャー回顧録は黙して語らず、である。しかし、グリーンほか、およびタイラーの著書が舞台裏を明かしてくれる。

簡単に記せば、キッシンジャーより見せられたコミュニケ草案の台湾の個所をロジャースはグリーン (Marshall Green) 国務次官補 (東アジア担当) に見せた。グリーンは一読して咄嗟に日本や韓国への相互防衛条約遵守の項があるのに引き換え、台湾との条約については一言も文言が入っていないことに気付き、ロジャースに伝えた。米国内で批判が噴き出すのは必至である。キッシンジャーがおずおずとニクソンを宿舎に訪ね、このことを伝えると、ニクソンは激怒した。瀟洒な宿舎のなかを下着のまま動き廻りながら、国務省の官僚制を罵った。ロジャースもニクソンに会った。このあと、キッシンジャーはグリーンに「コミュニケにケチをつけた」と憤りをぶちまけた。このときばかりは誇り高いグリーンが敢然とキッシンジャーに反論した⁴⁵⁾。

喬に対して、キッシンジャーは「このコミュニケは米国内で政治問題化する恐

44) 同上 : Kissinger (1979)1083

45) Kissinger (1979)1083; Green et al (1994) 146 -147, 161 -165; Tyler (1999) 138 - 140; Mann (1998) 48

れがある」[“台湾コミュニケ”として米国内で受け止められては困る]などと粘った。そして最高指導者たちも結局キッシンジャーの修正を認めたようで、今日、われわれの知る28日付の「上海コミュニケ」となった。のちの説明文書(3/8/72)のなかに次の件がある。「韓国と日本については、意図的に条約への言及を除去した(しかし、それぞれの国との結びつきや支援については強力な用語を用いた)。こうして、台湾との条約の問題を迂回できた」。具体的には「相互防衛条約上の義務は引き続き遵守する」が最終コミュニケで姿を消した。代って、韓国については、「緊急な結びつきを維持する」、日本については、「日本との友好関係を最高度に重視しており、現存の緊密な結び付きを引き続き発展させる」と言い換えられた。

上海での昼間の喬との会談の終りの方では、夕刻に予定されていた米国側のプレスブリーフィングについて、キッシンジャーは独り語りのように述べている⁴⁶⁾。

(1) 米国の台湾への条約上のコミットメントについて聞かれるはずだが、大統領の議会向け外交教書で述べた通りだ、とだけ答える(大統領はこのなかで台湾へのコミットメントを明言していた)。

(2) 何か秘密はあるか?と訊かれたら、答は「ノー」だ。コミュニケで明言されてないことで何か話題になったかときかれても、「ノー」と答える。

(3) 毛主席の健康状態についての質問が出れば、「健康だ」と言うておく。

(4) 記者会見にはグリーンを同席させるが、喋るのは私だ。

この(4)は“アリバイ作り”であることが明々白々である。

同じ会談のなかで、23日に軍事情報を漏らした相手の葉軍事委員会副主席にもう一度、15分間位会う約束があるが、いつ会えばよいか、と喬に問うている。このあとの深夜にかけての会談でキッシンジャーは喬にもまたソ連軍の配備状況を説明した。

上海到着後、ニクソンと周が修正されたコミュニケにイニシャルをした。「上海コミュニケ」(2月28日付)は1日早く同行のプレスに配布されたおり、夕刻にキッシンジャーはブリーフィングを行った。予め、『ロスアンジェルス・タイ

46) Memcon 2/27/72 1230 - 155pm 同上ファイル

ムズ』記者にしょっぱなの“やらせ”の質問をさせた。「なぜ米国政府は台湾との条約へのコミットメントを〔コミュニケで〕明示しなかったのか」と。キッシンジャーは2月9日の大統領の議会向け外交教書のなかで、台湾へのコミットメントが述べられており、そのことには変わりはない」と答え、あとはこの一点で押し通した。グリーンもニクソンに言い含められ、いやいや出席したが、キッシンジャーが30分間ほとんどひとりで喋った。グリーンが口を出したのは、キッシンジャーが発音出来なかった自分のカウンターパートである喬冠華の発音をキッシンジャーに代ってしてやったこと位だった⁴⁷⁾。

上海での最後の日の午後、周は個人的にロジャース国務長官のホテルの部屋を訪ねた。今回、ロジャースや国務省関係者が蔑ろにされたことへの周特有の気配りだった⁴⁸⁾。

台湾問題は共和党右派にとっての試金石だった。ブキャナンは配られたコミュニケを見て、愕然となり憤激し、キッシンジャーのブリーフィングへの出席も取り止めた。そもそもブキャナンは共和党右派對策として一行に加えられていた。ニクソンの長年の個人秘書ウッズ (Rose Mary Woods) も「あんな奴ら (these bastards) に〔台湾を〕売りわたした」と激昂していた。彼女はブキャナンの良き理解者だった。その夜 (28日) の周主催の中国での最後の晩餐会には二人とも渋々ながら出席した⁴⁹⁾。

グリーンは上海で大統領一行と別れ、日本へ直行し、そのあとアジア、太平洋の13カ国への報告の旅に出た。ロジャースの進言でニクソンがグリーンに命じたことであった。ニクソンは帰途、機上から佐藤総理あてのメッセージを打電するという配慮も示した。グリーンにはNSCのホルドリジが随行した。東京では、佐藤と福田赳夫外相に、“中国では裏取引がなかった”ことを強調した⁵⁰⁾。

台湾では、蒋介石総統がグリーンに会うことを拒否。行政院長に就任していた

47) Green et al (1994) 166

48) Green et al (1994) 164, 165; Tyler (1999) 141; MacMillan (2007) 315-316

49) Tyler (1999) 143; MacMillan (2007) 315. Mann (1998) 53も参照

50) 福田=グリーン会談の議事録は以下に見られる。Amembassy Tokyo to Secstate 2/29/72
Secret Tokyo 2050 “Meeting with Foreign Minister Fukuda, Feb 28, 1972” For Sec from Green

その子息の蔣経國が会ってくれた。

ニクソンはワシントンに戻るや議会での演説が待っていた。大統領専用ヘリコプターが議会の庭に到着する時刻をテレビのプライムタイムにぴたりと合わせ、外交成果を最大限にアピールした。その舞台裏には、29歳のホワイトハウス補佐官チェイピン (Dwight L. Chapin) の数か月に亘る綿密な計算と“POLO II”随同行の体験があった。それは、秋の大統領選挙を睨んだ「チェイピンの最高傑作」だったし、それはかれの上司であるホルドマン首席補佐官の手柄でもあった⁵¹⁾。

IX おわりに

1968年の大統領選挙がニクソンにとって薄氷を踏むような勝利だっただけに、かれは大統領に就任したときから、次の選挙のことで頭が一杯だった。対中 (72年2月)、対ソ (72年5月) の外交的成果や「(ヴェトナム) 和平は間近」との10月末のキッシンジャー発言などにも助けられて、72年選挙ではニクソンは歴史的圧勝を飾った。総投票数の60.8%に相当する4,600万票を獲得し、50州のうち49州を席捲した。選挙人数は520。相手候補の民主党上院議員 (サウスダコタ州選出)、マクガヴァン (George McGovern) は、専らヴェトナム反戦を掲げて戦ったがマサチューセッツ州と「ワシントン特別区」(首都) を手にしたのみで、地元州でも敗北するという屈辱を舐めた。獲得総投票数2,850万票で17人の選挙人だった。(それでもニクソンには不満だった。1964年のジョンソン大統領のゴールドウォーターに対する圧勝ぶりには及ばなかったからである。同時に行われた議会選挙でもニクソンの共和党は民主党から多数派を奪回できなかった。) ニクソンは2期目の終わりまでには、中国と国交正常化を達成する心積りだった。ウォーターゲート事件による1974年夏のニクソン辞任によりその望みは絶たれた。

ニクソン大統領の「チャイナ・イニシアティヴ」と訪中は、8億の人口を抱えながら孤立状態に陥っていた中国を、暴発させないために、国際社会に引き入れ、責任ある行動をとらせよう、という今日の用語で言う「関与政策」的発想と、ニ

51) Gergen (2000) 58. ホルドマン大統領首席補佐官は11月の選挙を念頭に置いて、ニクソンの一挙手一投足が米本土のプライムタイムに報道されるように配慮した。MacMillan (2007) 273は、「ホルドマンの大傑作」と評した

クソンの“ロマンチズム”との結びつきに触発されたものである。

ニクソンは回顧録に次のように記した。

「このあと20～30年の間に対中関係をさらに改善しなければならない、との信念を北京滞在中に深めた。さもなければ、われわれはいつの日か、世界史のなかに存在する最強の敵と相まみえることになるだろう」⁵²⁾。

多くの先行研究のように、ニクソンをこの対中戦略の「先導者」「機関士」だとして、キッシンジャーを「追随者」「いやいやながらの乗客」に譬えることは、確かに歴史の一断面を示すものである。

キッシンジャーは対中和解の可能性が極めて低い (fat chance)、と懐疑的に見ていただけでなく長期的観点からの中国への警戒も忘れなかった。この点で言えば、キッシンジャーはニクソンより一歩先を見越していたとは言えないだろうか。

キッシンジャーは当初、まず、米国外交が突然シフトすることに同調できなかった。しかし、次のようにも、その現実的思考を表現している。「たとえ弱く、内向きの中国であっても、その図体の大きさは近隣の小国に潜在的脅威となる」、米国にとっての問題は「比較的対外侵略性の少ない、孤立主義を維持する中国を変えようとするものなのか」ということである。「米国は中国が世界的強国として国際政治裡に立ち現れ、ソ連と同じように米国と競争することを本当に望むのか」「なぜ、中国を国際社会に引き込むことが必然的にわれらの利益になるのか」と⁵³⁾。

しかし同時にキッシンジャーは自分の外交構想の中心に絶えず据えられていたソ連に対して、中国が圧力として働くことにも気付いていた。ニクソンは米中和解と米ソ軍備管理とを軸に「平和の構造」の構築を唱え、あたかも中ソに対して等距離外交をとるかの姿勢を見せた。しかし、実際には中国にソ連の軍事情報を提供するなど中国をソ連へのカウンターバランスとして梃子入れをしており、印

52) Nixon (1978, 1990) 577. Tyler (1999) 157も参照

53) Haldeman (1978)91; Haig (1992)257; MacMillan in Logevall and Preston (2008) 109; Minute of the SRG Meeting 5/15/69 *FRUS 1969 - 1976*, Vol. XVII, 33, 36 - 37, quoted in MacMillan 同上119

パ紛争を機にこの側面はより鮮明となった。

ついでながら、ニクソン個人は日本を中国に対するカウンターバランスにしよ
うと考えていた、と拙論の筆者は推論している。結果的に見れば、「平和の構造」
の構築も、対中、対ソ「デタント」も“形を変えた対ソ封じ込め”“形を変えた
冷戦の継続”と呼ばざるを得ない⁵⁴⁾。

ニクソンが中国へ飛び立つ3日前に、キッシンジャーはニクソンに対して次の
ように語った。

「これからの15年間、われわれはソ連に対抗するために、中国寄りにならねば
なりません。全く非情緒的に (totally unemotionally) われわれは勢力均衡ゲー
ムを実践せねばなりません。ロシア人の行動を正し、律するために中国人を必要
とします。」⁵⁵⁾

しかも驚くべきことに、キッシンジャーは「マオタイ酒もウオッカも両方飲む」
との表現で、米国の対中和解が対ソ・デタントを壊すことなく、中ソを手玉にと
る「三角外交」を実践できると過信していた。結果は、周知の如く、デタントは
短命に終る。

一方、キッシンジャーはドブリニンとの71年8月7日の会話で、「世界にとつ
ての真の危険は中国と日本が結び付くことだ」と述べた。ドブリニンも警戒すべ
きは7月15日の「ニクソン・ショック」が日本を中国に接近させ、“中日協商”
が形成されることだ、と同趣旨の発言をしていた⁵⁶⁾。中ソ対立の亀裂の深さを窺
わせるものである⁵⁷⁾。

米中の“反ソ同盟”的性格はカーター (James Earl “Jimmy” Carter, Jr.) 政
権期に一層鮮明となった。この意味では米国は驕りの出始めた覇権の立て直しの
ために中国を道具として使ったともいえる。しかし、40年を経たいま、その覇
権が中国からの挑戦を受けつつある。

ニクソンの「関与政策」とキッシンジャー的な脅威認識とは、歴代の米国政

54) Dobrynin (1995) 195に、ニクソン外交についてのソ連側の認識が記されている。FRUS, 1969-1976 Vol. I. 185も参照

55) FRUS, 1969-1976 Vol. I. 359

56) 例えば、Burr (1999) 44

権の対中政策のなかで揺れ動きながら、あれから40年を経た今日に至るまで一貫して続いているのである。

[追記] 本文中に登場する中国人名のローマ字表記は英文史料原本にあるままのWade-Giles式により、拼音(インピン)式表記への変換はしなかった。

【資料】

[I] 一次資料

殆んどが「ニクソン大統領文書」(“The Nixon Presidential Materials Project” at the National Archives II, College Park, Maryland) の内のNational Security Council Files Collectionを利用した。

このNPMPの資料は2010年の時点でThe “Richard M. Nixon Library and Birthplace” at Yorba Linda, Californiaへ移管の過程にある。

なおFRUS, 1969-1976 Vol. I は、U.S. Department of State, *Foreign Relations of the*

57) ソ連の対中脅威認識には人種的なトーンが潜んでいたと指摘される。キッシンジャーは黄華大使に「ソ連は、中国と日本が組んで白人(white people)に対抗しようとしているのではないかと危惧している」と述べた。また、キッシンジャーはこのあと1972年6月にも訪中し、周に会う。周によれば、「1955年のソ連と西独の国交正常化の際、フルシチョフはアデナウアーに『中国人はとても恐ろしい人間だ。黄色い大群(the Yellow Horde)が、また襲って来るかもしれない』と語った」[Memcon 9/19/72 617-745 pm NYCおよびOne More File, Memcon Hak Visit 19-23 June 1972 ともにNSC File For the President's File (Wriston Load) — China Trip/Vietnam] キッシンジャーが“日中提携”を恐れていたことについては、ナイ教授(Joseph S. Nye, Jr.)の証言がある。

ナイ——キッシンジャー氏は以前から日中両国が和解し、手を組んで一体となり、米国に対抗してくるというシナリオを恐れています。私はそんなことが起こるとは思っていないが……。

春原——キッシンジャー氏は本気でそう考えているのでしょうか？

ナイ——ええ、私は彼が何度もそうした考えを口にするのを聞いていますから。その背景には、彼が非情に古典的な欧州の勢力均衡モデルを基礎に考えていることがあるのでしよう。彼はそれ(日中の和解と対米共同戦線)はあり得ると信じています。

アーミテージ——考えてもみて下さい。キッシンジャーやブレジンスキーといった人たちはこれっぽっちも日本のことやアジアのことなどわかっていないのです。まったく、本当に！

[リチャード・L・アーミテージ、ジョセフ・S・ナイ Jr. 春原剛『日米同盟 vs. 中国・北朝鮮』文藝春秋、2010年、P. 106]

United States, 1969-1976 Volume I (Foundations of Foreign Policy, 1969-1972) (Washington, D.C.: United States Government Printing Office, 2003)を省略したものである。

[Ⅱ] 二次資料

- Burr, William (ed.) (1999) *The Kissinger Transcripts: The Top-Secret Talks with Beijing & Moscow* New York: The New Press.
- Dobrynin, Anatoly (1995) *In Confidence: Moscow's Ambassador to America's Six Cold War Presidents* New York: Times Books.
- Garthoff, Raymond L (1994) *Détente and Confrontation: American-Soviet Relations from Nixon to Reagan* (Revised Edition) Washington, D.C.: The Brookings Institution.
- Gergen, R. David (2000) *Eyewitness to Power: The Essence of Leadership: Nixon to Clinton* New York: Simon & Schuster.
- Green, Marshall, John Holdridge, and William N. Stokes (1994) *War and Peace with China: First-Hand Experiences in the Foreign Service of the United States* Bethesda, MD: DACOR Press
- Haig, Alexander M., Jr., (with Charles McCarry) (1992) *Inner Circles: How America Changed the World: A Memoir* New York: A Time Warner Company.
- Haldeman, H.R. (with Joseph DiMona) (1978) *The Ends of Power* New York: Times Books.
- Kalb, Marvin and Bernard Kalb (1974) *Kissinger* Boston: Little, Brown and Company.
- Kissinger, Henry (1979) *White House Years* Boston: Little, Brown and Company.
- (1994) *Diplomacy* New York: Simon & Schuster.
- MacMillan, Margaret (2007) *Nixon and Mao: The Week That Changed The World* New York: Random House.
- (2008) “Nixon, Kissinger, and the Opening to China” in Fredrik Logevall and Andrew Preston (eds.), *Nixon in the World: American Foreign Relations, 1969-1977* New York: Oxford University Press.
- Mann, James (1999) *About Face: A History of America's Curious Relationship with China, From*

Nixon to Clinton New York: Alfred A. Knopf.

Nixon, Richard (1990) *RN: The Memoirs of Richard Nixon* New York: A Touchstone Book, [Originally published: New York: Grosset & Dunlap, 1975]

Tyler, Patrick (1999) *A Great Wall: Six Presidents and China: An Investigative History* New York: PublicAffairs

Walters, Vernon A. (1978) *Silent Missions* Garden City, NY: Doubleday & Company.

緒方貞子 (添谷芳秀訳) (1992) 『戦後日中・米中関係』 東京大学出版会

添谷芳秀 (2005) 『日本の「ミドルパワー」外交—戦後日本の選択と構想』 筑摩書房

張紹鐸 (Zhang Shaoduo) (2007年) 『国連中国代表権問題をめぐる国際関係 (1961-1971)』 国際書院

毛里和子、増田弘監訳 (2004) 『周恩来・キッシンジャー機密会談録』 岩波書店

毛里和子、毛里興三郎訳 (2001) 『ニクソン訪中機密会談録』 名古屋大学出版会

林代昭 (Lin Dai-zhao) (1997) (渡邊英雄訳) 『戦後中日関係史』 柏書房